(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2015-159842
(P2015-159842A)
(43)公開日　平成27年9月7日(2015.9.7)

(51)Int.Cl.		F I		テーマコード（参考）
A45D 44/22	(2006.01)	A45D	44/22	C

審査請求 有　請求項の数 7　ＯＬ　（全 10 頁）

(21)出願番号　特願2014-34948(P2014-34948)
(22)出願日　平成26年2月26日(2014.2.26)

特許法第３０条第２項適用申請有り　掲載年月日：平成２５年１０月１８日　掲載アドレス：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｔｏｋｙｏ－ｍｉｄｔｏｗｎ．ｃｏｍ／ｊｐ／ａｂｏｕｔ／ｐｒｅｓｓ／ａｗａｒｄ２０１３１０１８＿０１．ｐｄｆ　掲載年月日：平成２５年１１月１８日　掲載アドレス：ｈｔｔｐ：／／ｉｓｓｈｉｎ－ｄｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｆａｃｅｐａｃｋ．ｈｔｍｌ

(71)出願人　511309713
一心堂本舗株式会社
東京都千代田区麹町２－３－３
(74)代理人　100168583
弁理士　前井　宏之
(74)代理人　110000039
特許業務法人アイ・ピー・ウィン
(72)発明者　戸村　憲人
東京都千代田区麹町２－３－３　一心堂本舗株式会社内

(54)【発明の名称】美容パック用基材シート、それを用いた美容パック材、及び、美容パック材の製造方法

(57)【要約】
【課題】美容パック中であっても個人識別性の高い美容パック材を提供すること。
【解決手段】本発明の美容パック材の製造方法は、再生セルロース連続長繊維不織布に、油性グラビアインキをグラビア印刷する工程と、前記油性グラビアインキが印刷された再生セルロース連続長繊維不織布に美容液を含浸させる工程と、を含むことを特徴とする。
【選択図】図２



【特許請求の範囲】
【請求項１】
再生セルロース連続長繊維不織布に油性グラビアインキからなる隈取模様がグラビア印刷によって印刷されている美容パック用基材シート。
【請求項２】
前記油性グラビアインキがウレタン系二液硬化型であることを特徴とする、請求項１に記載の美容パック用基材シート。
【請求項３】
前記再生セルロース連続長繊維不織布の目付が８０～１００ｇ／ｍ^{2}であることを特徴とする、請求項１又は２に記載の美容パック用基材シート。
【請求項４】
請求項１～３のいずれかに記載の美容パック用基材シートに美容液が浸潤している美容パック材。
【請求項５】
再生セルロース連続長繊維不織布に、油性グラビアインキをグラビア印刷する工程と、
前記油性グラビアインキが印刷された再生セルロース連続長繊維不織布に美容液を含浸させる工程と、を含むことを特徴とする美容パック材の製造方法。
【請求項６】
前記油性グラビアインキがウレタン系二液硬化型であることを特徴とする、請求項５に記載の美容パック材の製造方法。
【請求項７】
前記再生セルロース連続長繊維不織布の目付が、８０～１００ｇ／ｍ^{2}であることを特徴とする、請求項５又は６に記載の美容パック材の製造方法。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、美容液の浸潤した顔を覆う美容パック材に関する。
【背景技術】
【０００２】
従来より、顔皮膚の美容のため、栄養分や水分の補給等を目的として美容パックが行われている。
【０００３】
美容パックは、有効成分を含む液体やゾル及びそれらを泡状にしたもの（以下、纏めて「美容液等」という）を顔皮膚に塗布した後、一定時間経過してから顔に塗布していた美容液等を除去し、洗顔等をすることで完了する。
【０００４】
通常、美容液等による美容効果を発揮させるためには、顔皮膚上に美容液等を一定時間保持しておかなければならない。従って、美容パックの際には、美容液等を顔面全体に均一になるように塗布したり、美容液等が乾燥したり垂れたりしてしまわないようにラッピング材で覆うような手間が必要となり、粘性が高いあるいは泡状の美容液等であれば前者の手間が大きく、粘性の低い美容液等であれば後者に関する手間が大きくなる。
【０００５】
そのため、粘性の低い美容液等については、それらををある程度保持することのできるシート材を基材として、該基材に予め美容液等を含浸させておいたものを美容パック材とし、この美容パック材で顔を覆う美容パック法が提案されており、更に近年では、美容パック材に含まれる有効成分そのものによる美容効果だけでなく、美容効果を向上させたりする等の付加価値を備えた美容パック材が開発されるようになっている。
【０００６】
例えば、下記特許文献１には、美肌効果の向上のためのマッサージを美容パック中に行い易くすることを目的として、マッサージの手順等が鏡文字によって記された美容パック

材が開示されている。
【０００７】
また、下記特許文献２には、マイナスイオン電子作用で美肌効果を齎すことを目的として、ゲルマニウム金属片が柔軟質樹脂シートに埋め込まれた美容パックシートが開示されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００８】
【特許文献１】特開２０１３－　７８４６７号公報
【特許文献２】特開２００９－１０７９７８号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００９】
一般的に美容パック材は顔面を覆うため、その基材は顔の大きさ程度の円・楕円形状に形成され、更に、パック中に、呼吸・会話・視認が可能となるよう、口・鼻・目に相当する箇所に孔や切り込みが設けられているが、美容パック中は特定の色調・質感を有する基材が顔面全体に張り付いている状態となるため、美容パック中の顔面は美観に優れず、また、他者が見た場合の個人識別性が著しく低下し、場合によっては周囲に不要な恐怖心を生じさせてしまうこともあった。
【００１０】
そのため、美容パックは人目を憚って行うことが当然とされ、従来の美容パック材は実質的に利用できる場所や状況（主に他人の存在に関する）について、制限の大きいものでえあった。
【００１１】
本発明は、美容パック中であっても個人識別性の高い美容パック材及びその製造方法の提供を目的とする。
【課題を解決するための手段】
【００１２】
上記課題を解決するため、本発明の美容パック用基材シートは、再生セルロース連続長繊維不織布に油性グラビアインキからなる隈取模様がグラビア印刷によって印刷されていることを特徴とする。
【００１３】
本発明の美容パック用基材シートによれば、液体や乳液状の美容液が浸潤した状態における透明度が高く他者に見られた際の個人識別性が高いため、予期しない対面者が現れた場合のトラブルが従来よりも軽減できることが期待される共に、隈取模様により伝統芸能である歌舞伎の演者を模したポージング等と組み合わせることで、他者と共に楽しむことのできる美容パックとなることから、従来の美容パック用基材シートよりも美容パックを実施できる場所や状況が広くなる。
【００１４】
加えて、本発明の美容パック用基材シートの隈取模様は、再生セルロース連続長繊維不織布に対してグラビア印刷によって油性グラビアインキが印刷されたものであるので、本発明の美容パック用基材シートは、美容液が浸潤してもインキの溶出が抑制された優れた美容パック用基材シートとなる。
【００１５】
なお、本発明の美容パック用基材シートにおいては、前記油性グラビアインキをウレタン系二液硬化型のものすると、再生セルロース連続長繊維不織布に対する展着性がより向上し、美容液が浸潤した場合のインキの溶出し難さや耐摩耗性がより向上するため好ましい。
【００１６】
また、本発明の美容パック用基材シートは、基材シートである再生セルロース連続長繊

維不織布の目付が小さ過ぎると、美容液を浸潤させても美容パックの効果を得るために充分な量の美容液を保持できなくなる。一方、基材シートの目付が大き過ぎると、余剰の美容液を保持することにもなり、得られる美容パックの効果に対して不要なコスト増が生じることになる。従って、本発明の美容パック用基材シートにおいては、目付は８０～１００ｇ／ｍ^{2}程度とすることが好ましい。

【００１７】

また、上記課題を解決するため、本発明の美容パック材の製造方法は、再生セルロース連続長繊維不織布に、油性グラビアインキをグラビア印刷する工程と、前記油性グラビアインキが印刷された再生セルロース連続長繊維不織布に美容液を含浸させる工程と、を含むことを特徴とする。

【００１８】

そのため、本発明の美容パック材の製造方法によれば、美容パック時の透明度が高く、かつ、色落ちのし難い任意の模様を備えた美容パック材を、容易に得ることが可能となる。

【００１９】

なお、本発明の美容パック材の製造方法においては、前記油性グラビアインキをウレタン系二液硬化型のものとすると、より色落ちのし難い美容パック材が得られるため、より好ましい。

【００２０】

また、本発明の美容パック材の製造方法においては、より安全性の高い美容パック材を得るために、前記油性グラビアインキをＮＬ規制をクリアした原料からなるインキとしたり、皮膚パッチテストを行って皮膚刺激性を確認しておくことが、より好ましい。

【図面の簡単な説明】

【００２１】

【図１】実施例１の美容パック用基材シートの形状を例示する模式図である。

【図２】実施例１の美容パック用基材シートに図柄印刷された状態を例示する模式図である。

【発明を実施するための形態】

【００２２】

以下、本発明の製造方法の実施例を詳細に説明する。但し、以下に示す実施例は、本発明の技術思想を具体化するための美容パック材の製造方法の一例を示すものであって、本発明をこの実施例に限定することを意図するものではなく、本発明は特許請求の範囲に示した技術思想を逸脱することなく種々の変更を行ったものにも均しく適用し得るものである。

【００２３】

［実施例１］

［基材シート］

基材としては目付け８０ｇ／ｍ^{2}の再生セルロース連続長繊維不織布を用いた。

銅アンモニア溶液にコットンリンターを溶解させた銅アンモニアレーヨン原液を流下緊張紡糸法により連続で紡糸することで、繊維が網状になりながら相互接着するように為し、その後、高圧水流処理で３次元的に交絡させることで、本実施例で用いる再生セルロース連続長繊維不織布原反を得た。

【００２４】

次いで、上記で得られた再生セルロース連続長繊維不織布原反を、図１に示すように裁断及び切り込みを入れること、本実施例で用いる基材シートとした。

【００２５】

［美容液］

グリセリン、１，３－ブチレングリコール、ヒアルロン酸ナトリウム、加水分解コラーゲン、水溶性コラーゲン、リン酸アスコルビルマグネシウム、椿種子エキス、茶葉エキス、里桜花エキス、リンゴ酸、アスコルビン酸、α－アルブチン、ポリクオタニウム－５１

、ヒトオリゴペプチド－１、マンニトール、フラーレン、ポリビニルピロリドン（ＰＶＰ）、ベタイン、ｄｌ－ピロリドンカルボン酸ナトリウム、ソルビトール、セリン、グリシン、グルタミン酸、アラニン、リシン、アルギニン、トレオニン、プロリン、アミノカプロン酸、アルニカエキス、胡瓜エキス、西洋木蔦エキス、西洋接骨木エキス、銭葵エキス、パリエタリアエキス、ラベンダー油、ゼラニウム油、グリチルリチン酸ジカリウム、（アクリレーツ／アクリル酸アルキル（Ｃ１０－３０））クロスポリマー、ポリエチレングリコール－６０水添ヒマシ油、水酸化カリウム、キサンタンガム、メチルパラベン、フェノキシエタノールからなる分散質と、分散媒としての水からなる乳液状のゾルを本実施例で用いる美容液とした。

【００２６】

［インキ及び印刷方法］

上記得られた基材シート及び不織布原反に対してウレタン二液硬化型の油性グラビアインキを用いて、油性グラビア印刷（印刷後のエイジングは４０℃、２４時間とした）を行った。基材シートに対しては図２に示したような図柄で印刷することで、本実施例の美容パック用基材シートを得た。

【００２７】

不織布原反に対しては赤色及び黒色の顔料インクを、最終的に３ｃｍ×５ｃｍのべた塗り印刷片がそれぞれ得られるように印刷した後、３ｃｍ×５ｃｍ片に裁断することで本実施例の試験片とした。なお、インキに含まれる顔料にはＮＬ規制をクリアした顔料から選び、黒色：カーボンブラック、赤色：アゾ色素、青色：銅フタロシアニンとした。

【００２８】

［実施例２］

目付が１００ｇ／ｍ^{2}である再生セルロース連続長繊維不織布を不織布原反として用いた以外は、実施例１と同様にして試験片を得た。

【００２９】

［比較例１］

水性グラビアインキ（顔料は実施例１と同様の、黒色：カーボンブラック、赤色：アゾ色素）を用いて水性グラビア印刷を行うことで試験片にインキを印刷した以外は、実施例１と同様にして試験片を得た。

【００３０】

［比較例２］

水性フレキソインキ（顔料は実施例１と同様の、黒色：カーボンブラック、赤色：アゾ色素）を用いてフレキソ印刷を行うことで、試験片にインキを印刷した以外は、実施例１と同様にして試験片を得た。

【００３１】

上記の様にして得られた各試験片については、以下のようにインキの色落ち・色移りがないかの確認試験を行った。試験の結果は纏めて表１に示した。

【００３２】

［インキ溶出性試験］

各試験片を同じ大きさ（３ｃｍ×５ｃｍ）の濾紙と、印刷面が接するように合わせた状態で、上記美容液に含浸させる。それをバリア性のある袋に密閉した状態で４０℃、９日間静置し、濾紙への色移りがないかを目視で確認することで、インキが美容液によって溶け出さないかどうかを判定した。

【００３３】

［湿潤状態における耐摩擦性試験］

美容液に９日間含浸された状態の上記インキ溶出試験実施後の試験片の印刷面を、乾いた布で軽く５回拭き、色落ちが見られないかどうかを目視で確認することで、湿潤状態における耐摩擦性（以下、「耐湿摩性」ともいう）を判定した。

【００３４】

【表１】

	目付(g/m^2)	インキ	版式	非溶出性	耐湿摩性
実施例1	80	油性	グラビア	○	○
実施例2	100	油性	グラビア	○	○
比較例1	80	水性	グラビア	○	××
比較例2	80	水性	フレキソ	○	×

	目付(g/m^2)	インキ	版式	非溶出性	耐湿摩性
実施例1	80	油性	グラビア	○	○
実施例2	100	油性	グラビア	○	○
比較例1	80	水性	グラビア	○	××
比較例2	80	水性	フレキソ	○	×

【００３５】
実施例１、２及び比較例１、２の全ての試験片において濾紙への色移りは見られず、インキの非溶出性は良好であった。

【００３６】
また、実施例１及び２においては、湿潤状態でも色落ちは見られず、耐湿摩性についても良好であった。一方、比較例１については、赤色及び黒色インクの双方に湿潤状態における色落ちが見られ、また、比較例２においては湿潤状態における赤色インクに関して色落ちが見られた。

【００３７】
［パッチ試験］
実施例１の美容パック材については、白色ワセリン及び生理食塩水を対照として以下のように２４時間連続貼付の閉鎖式パッチ試験を実施した。

【００３８】
（対象被験者）
選択基準：同意取得時の年齢が２０歳以上６０歳以下の日本人男性及び女性
除外基準：皮膚過敏症の者、接触性アレルギーのある者またはアレルギー症状を示す恐れのある者、検査結果に影響する可能性のあると思われる薬を服用または塗布している者、皮膚科に通っている者、妊娠中または妊娠している可能性のある者および授乳中の者、被験品貼付箇所にニキビ・吹き出物（広範囲）・シミ（広範囲）・傷・刺青・イボ・火傷痕等があることによってパッチテストの被験者として適さない者、本パッチテストに不適当と思われる既往症および現病症を有する者。
被験者数：２０名
被験者管理事項：貼付期間中の入浴は禁止した（ただし、観察部位に水をかけなければシャワー入浴は可）。剥離後観察期間中の入浴およびシャワーに関しては、観察部位に強い刺激を与えないように注意した。試験期間中（初回観察前日から最終観察当日）は、不規則な生活（睡眠不足、暴飲暴食など）を禁止した。試験期間中（初回観察前日から最終観察当日）は、発汗を伴う激しい運動を禁止した。剥離後24時間の観察まで、観察部位に

触れることを禁止した。

【００３９】

（試験デザイン）

閉鎖法パッチテスト：「皮膚刺激性・感作性試験の実施方法と皮膚性状計測および評価」第１章　皮膚刺激性試験　第３節　ヒトパッチテスト（ｐ２９）に準拠。

判定基準：「皮膚刺激性・感作性試験の実施方法と皮膚性状計測および評価」第１章　皮膚刺激性試験　第３節　ヒトパッチテスト（ｐ２９）に準拠し、以下のような基準で判定した。

【００４０】

【表２】

所見	判定	評点
反応なし	陰性(－)	0
わずかな紅斑	弱陽性(±)	0.5
明らかな紅斑	陽性(＋)	1
紅班＋浮腫、丘疹	強陽性(++)	2
紅班＋浮腫・丘疹＋小水疱	強陽性(+++)	3
大水疱	強陽性(++++)	4

※強陽性（＋＋）以上の刺激反応が出た場合は、試験統括医師の判断によりその被験品に関する本試験を中止する場合があることとした。

【００４１】

【表３】

皮膚刺激指数値	分類
5.0以下	安全品
5.0超15.0以下	許容品
15.0超30.0未満	要改良品
30.0以上	危険品

※皮膚刺激指数
＝（被験品剥離後60分あるいは24時間の反応の強い方の総評点和／被験者数）×100

【００４２】
（パッチテスト実施手順）
貼付部位・観察部位：背部
貼付方法：被験品が充填された皮膚テスト用パッチテープ（パッチテスター「トリイ」鳥居薬品株式会社製）を、貼付部位に貼付する。
貼付時間：２４時間
観察タイミング：剥離後６０分経過後、及び、剥離後２４時間経過後
試験実施機関：芝パレスクリニック、ＳＯＵＫＥＮ臨床試験室
【００４３】
（試験結果）
パッチテストの試験結果を、表４及び表５に示す。
【００４４】

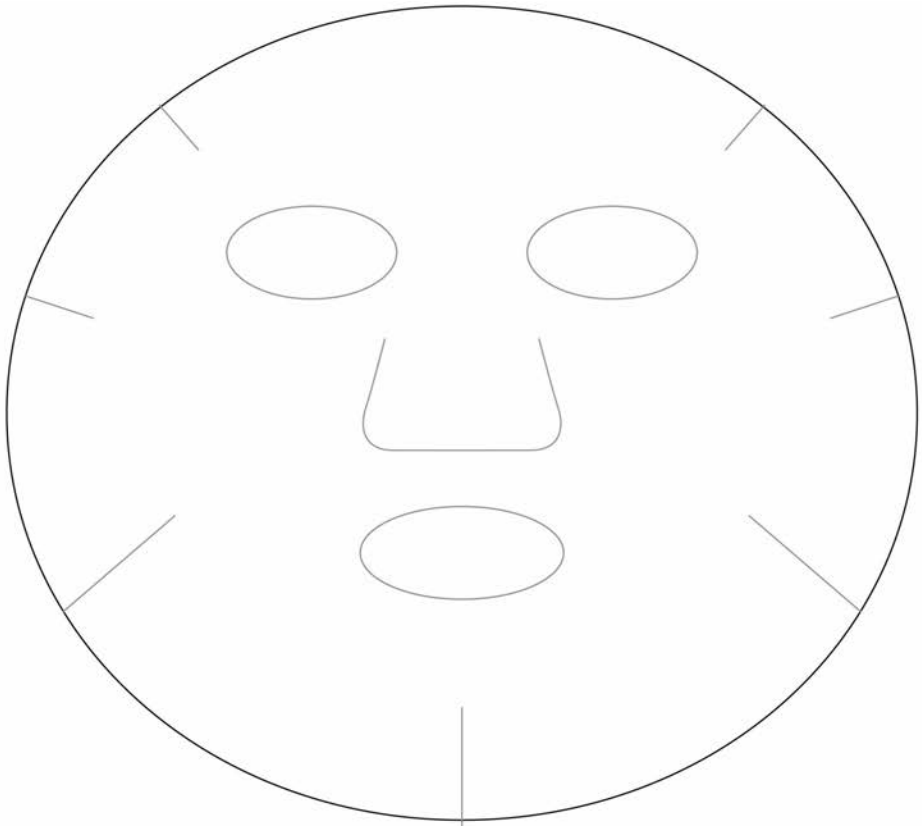
【表４】

	判定	該当者数	
		剥離60分後	剥離24時間後
実施例1	陰性(－)	19	20
	弱陰性(±)	1	0
	陽性(＋)	0	0
	強陽性(＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋＋)	0	0
生理食塩水	陰性(－)	20	20
	弱陰性(±)	0	0
	陽性(＋)	0	0
	強陽性(＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋＋)	0	0
白色ワセリン	陰性(－)	20	20
	弱陰性(±)	1	0
	陽性(＋)	0	0
	強陽性(＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋)	0	0
	強陽性(＋＋＋＋)	0	0

【００４５】

表４に示される通り、実施例１の美容パック材は、剥離６０分後で１名が弱陽性、１９名が陰性であり、剥離２４時間後で２０名が陰性であった。その結果、２４時間連続貼付による閉鎖法パッチテストにおける皮膚刺激指数は、２．５であり安全品と判定されるものであることが確認された。

【図１】



【図２】

